烏帽子折苧源氏

えぼしおりみばえげんじ

【解　説】

元禄三年（一六九〇）に大坂竹本座で初演（推定）、近松門左衛門作の時代物です。物語全体は源義経の伝説が元になっており、先行する幸若舞や能にも「烏帽子折」の作品があります。「伏見の里の段」は明治・昭和に上演記録がありますが、外題の書き方が様々で、同一曲であるかは定かではありません。昭和三十五年新橋演舞場での、四代竹本越路太夫と二代野澤喜左衛門による演奏の録音（CD「義太夫選集　竹本越路太夫」所収）がありますが、近年、人形浄瑠璃文楽での上演は途絶えています。

【あらすじ】

雪が降りしきる中、平家の追っ手から逃れる常盤御前と今若・乙若・牛若の三人の幼子たちは、伏見の里にたどり着き、灯りの点る家に一夜の宿を乞います。そこは弥兵平兵衛宗清の忍び妻、白妙の住家で

した。実は白妙は、源氏の忠臣、藤九郎盛長の妹でしたが、宗清の手前、義朝ゆかりの人を泊めがたい、早く落ち延びるようにと勧めます。親子は軒端をすぐに去ることができず、凍えて倒れる母に子たちは自らの衣服を脱いで着せかけます。夜半に忍んできた宗清が陰から様子をうかがい、すぐさま常盤親子の素性を見抜きますが、「流石源氏の根ざしなり」と子たちの姿に心を打たれます。今夜だけは親子を軒の下においてと嘆願する白妙に、宗清は悩んだ末、彼らを追い払うよう白妙に言いつけ、弓矢をとって空矢を射ます。その音に驚いた親子は逃げ去って行きました。宗清は、このまま六波羅の役人に捕らえられれば、清盛公への言い訳がたたないばかりか、助けたいと思う白妙の心も無駄になると諭します。やがて藤九郎が現れ、宗清との対面を望みますが聞き入れられず、宗清は「古栖の雛を飼い育て、初音を揚よ」と、三人の幼な子の未来を暗示する言葉を与えます。藤九郎は宗清に感謝し、勇んで東へ下るのでした。

伏見の里の段

〽降雪の音聞程に静なり　竹より奥の一つ庵猫の通ひ路跡付し　只一筋の道細く　油火ほのかに掻立て　女の業かしどけなき　引裂紙を結び継　半ば上たる伊豫簾　伏見の里の片辺り　女主の軒さびて　問ふ人稀なる折からに御いたはしや常盤御前　平家に世をばせばめられ　牛若君を懐に抱きかかへ参らせて　ならはぬ歩路ふみ迷ひ　今若君も乙若も　あづまからげはばきしめ　草鞋氷り足こごへ　覚へず知ずとぼとぼと　たどりたどりて車道　爰にも人の墨染めや　桜の寺の入相に　宿はからねど里の名は　伏見に行暮給ひける

常盤御前はともし火の影を便に尋ね寄　大和へ下る女なるが　稚き者を召具して　雪に道を失ふたり　一夜の情と有ければ　十八九なる女房紙燭かかげて椽に出　親子の人々をつくづくと打守り　ハアいたはしの有様やな　お宿申たふは候へ共　此頃平家の沙汰として　義朝の由緒を強く詮議の候　自は白妙とて藤

九郎盛長が妹源氏譜代の者なれ共　ふしぎの縁にて平家の侍　弥平兵衛宗清の忍び妻と成候へば　今にも夫宗清殿来り給はば　憂目をこそ見給はん　情なしとな思召ぞよ　わらはがつれなふ申すのもあなたがいとしさ　いづくへなり共落給へと　いと念此の詞の色　紙燭吹消入にけり

常盤も今は力無先へも行れず　後へ迚は戻られず　頼みの綱も切果て詮方尽ておはせしが　漸心取直し　只此上は運に任せてともかくも今宵は爰に明さんと　少し風よぐ軒陰に　小袖の褄の上がいを　敷寝の床と肩しかせ　笠を屏風のひぢまくら　昔は翠張紅閨に　透間の風も寒かりし　身はならはしと身を捨て　兄弟に降雪を打払い打払い　哀弔ふさよ千鳥　泣く泣く其夜を更さるる　間なく隙なく心なく　雪はこぼすが如くにて　寒風さつさつと烈くて　人の肌骨にしみ渡り　肌へをさす事　尖どき刃の如くにて　いたはしや母上は　労れたる身を寒気に破られ　悪寒五体を苦しめば　アア堪がた

やと伏転び　前後不覚に見へ給ふ

今若乙若驚きて　ノウ悲しや母上様と　額を押へ撫さすり　いかに乙若　母上の寒からんに物着せまさん　尤と　兄弟帯とき身せばなる　小袖を脱で母上の裾や枕にとり重ね打重ね　我はいとはで埋もるゝ　雪のはだか身哀なり　母は苦しき枕を上　アアいたはしの子供やな　か斗り母を大切にいかに孝行なれば迚　わごぜ達をこごへさせ　親も冥加に尽るぞとよ　風ばし引なべ着よと　着すれば脱で母に着せ　イヤ我々は寒からず　侍のならひにはいか成雪にも軍して　よき敵に引組時　寒しつめたしなんど迚　敵に後を見すべきか　乙若も寒いといふな兄上寒いと覚すな　とかいがいしげにいふ声に牛若目覚し這出て　見るを見まねに衣を脱　同じく母に着せまいらせ　手足もふるひこごゆれども　其色見せず歯ぎしみし　拳を握りこたゆる体　母は気もたへ目もくらみ　情なや浅ましや　百万餘騎の大将軍共仰がるべき若共に　一重の衣を着せ兼るは　いとおしの有様や　御身

達が志　綾錦より厚ければ　母は着ね共　暖なり　かわいの者やこちよれと　三人一所にかきよせて　抱き伏てぞ泣給ふ　理とこそ聞へけれ

月も夜半に更行ば　弥平兵衛宗清　女の庵に忍びしが　雪にうつろふ人影は　何者か怪しやと　傘かざしよく見れば　常盤親子にまがひなし　網代の魚ござんなれ　余さじと身繕ひ　猶も様子を窺ひ見れば　慈母のあはれみ孝子の振舞　さすが源氏の根ざしなり　いたはしさよ哀れさよ　今人々を助けし迚　源氏の運の末ならば　ついにはさがし出さるべし　たとへからめ取たり迚　つきんづ平家御果報の長久にもよもならじ　情しらぬは匹夫の勇　殊に我妻の為には主君なり　彼是助けて落さんと思ひしがイヤ待しばし　主君清盛公の御目がねを以て情を蒙り　助ては道立ず　搦捕ては情なしと取つ置つの一思案　ムム、ム、ムと斗り　さあらぬ体にて戸をたたけば　女房待兼柴の戸の　雪打払い草鞋も　とくとく庵へ伴ひける

今宵は殊なふ冷へ候ふ　先盃と暖めて　暫くさいつさされしが　イヤナフ宗清殿　自は源氏　御身様は平家　モシ只今にも義朝のゆかりと成ばサアいかがし給はん　とうら問へば　ハテいふ迄もなし　主君清盛公の　仰成ば　いかにおことが主なる迚用捨はならず　目にかからば搦捕て六波羅殿へ引立る　ガ只何事もしらぬが仏見ぬが花　と答へしが　親子の人々物腰の手に取様に聞へしを　女房はつと当惑の色目見て取宗清イヤコレ女房　表に小鳥共が軒に舎ってかしましい　アレ追払やれ　ノウ情なや　ふくら雀が羽をなやみ　雪に折れふすしの竹の笹に一夜の仮の宿　さのみにいたくは宣いそ　早夜も更ぬ床寒し　音せでおよれとすすめける　イヤ某は殺生好　鳥の声を聞ばとらでは置ず　是非追払へ　ハテ夜な夜なとまる小鳥ではなし　今宵一夜の　ハテ扨合点の悪い　然らば　某　追退ん　と弓矢取てかけ出る　女房は人々の影隠さんと引留る　もぎ放し突退て空矢四五本　差詰引詰射る音に　常盤驚き兄弟を前　後　にかきい

だき　ほうほう逃退給ひける

宗清とつくと見送りて　アレあれを見よや白妙雀共が逃るは逃るはハハハハハ　イヤ女房　今追払ふた小鳥共　其儘にして置ば　もし六波羅のイヤサ　狩人来つて見付なば討取は必定某此家に有て　余の狩人に搦め取れては清盛公へ言訳立ず　又おことが忠義も無足ナア　最前も云聞す通り　只いつ迄も雀々　と雀に譬へし若君は　成人の後今若君は鎌倉の惣追捕使　右大将兵衛ノ佐　源　頼朝公と号し奉る　乙若君は蒲の冠者範頼公　牛若丸は源九郎義経公と末の世に秀で給ひし大将は　雪にこごへ伏見の里にて　親子四人を宗清が助け置たる源家の苧　今の世迄も宮々の絵馬にも斯としられたり

藤九郎盛長は人々に行合しが　宗清が放つ矢は妹が二心かいぶかしと庵に立　事の要を聞とどけ　横手を打て涙をはらはらと流し　爰明給へ宗清殿　これは白妙が兄源氏の郎等藤九郎盛長にて候　心底によつて妹を差殺し　御邊と勝

負を決せん為是迄は来りしが　只今の志　生
々世々に忘がたし　一礼の為対面せんと言へ
ば宗清　ハハハハハと打笑ひ　又斑替りの雀が
来つてよしなき事を　囀るよな　某平家の扶持
を蒙りながら源氏方の礼を受　此宗清が立べき
か　チエエ狼狽たる歯抜鳥　弓手も馬手も狩人
の追鳥狩の網高し　鷹に取るな餌さしにさされ
な　古巣の雛を飼そだて初音を上よ若者　と情
の詞に　ハハハア仁愛深き御恵　身はひしびし
をに成迚も　此厚恩は忘れ申さず　チエエ頼も
しき田面の雁　春は越路に立帰り　源氏一味の
友千鳥　大将軍の羽がい下　上たる旗は白鷺や
むれ居る鳥の　翅をならし　会稽の巣立して上
見ぬ鷲の　誉を見せん　ホホホ　タハハハハハ
尤々　急げや急　山鳥の尾のしだれ尾の長居は
畏れお暇と　夕告の鳥がなく　東路さして飛
鳥の飛が如くに下りける　心はさすが大鳥の千
里一はね源氏の運　開くる末こそ目出度けれ

いちのたにふたばぐんき
一谷嫩軍記

【解　説】

宝暦元年（一七五一）十二月、豊竹座初演。並木宗輔（千柳）・浅田一鳥・浪岡鯨児（なみおかげいじ）・並木正三らの合作。「平家物語」「源平盛衰記」を基に、敦盛（あつもり）最期と忠度（ただのり）都落を中心に脚色したもの。三段目までは並木宗輔が書きましたが、この段が絶筆となり、その後は一鳥らが完成させました。

【あらすじ】

源義経は、家臣、熊谷次郎直実に弁慶筆の「一枝を切らば一指を切るべし」と書かれた制札（立て札）を渡し、熊谷は我が子小次郎と共に出陣します。一谷の合戦では、小次郎と平山武者所が先陣争いをし、後から駆けつけた熊谷は、負傷した小次郎を陣屋へ連れ帰ります。その後、平家の陣から大将敦盛が現れ、熊谷は敦盛を追って、須磨浦で敦盛を討ち取ります。

熊谷が陣屋に戻ってくると、妻の相模と、敦盛の母藤の局が待ち受けています。藤の局は熊谷に「息子の敵」と斬りかかりますが、やむを得ず討ち取ったこと、敦盛が立派な最期を遂げたことを聞かされ、涙にくれます。そこへ義経が現れ、敦盛の首実検となります。その首を見て驚く相模と藤の局。熊谷は敦盛の身代わりに、実子小次郎の首を討っていたのでした。義経は、制札の言葉に込められた意味をよく察してくれた、正しくこれは敦盛の首であると熊谷を誉めます。

法螺貝の音が鳴り響き、熊谷は出陣の用意に向かいます。陰で事の次第を聞いていた梶原景高は、鎌倉（頼朝）へ注進と駆け出しますが、石屋の弥陀六が投げた石のみで息絶えます。この弥陀六は、かつて幼い義経と母を助けた平家の武将、弥平兵衛宗清でした。義経を助けたことで今の平家の凋落となったと嘆く弥陀六。そこへ出陣の支度を調えた熊谷が現れますが、兜を脱ぐと既に髷を切っており、出家の意志を伝えます。一同は互いを思いやり、涙ながらに別れて行くのでした。

熊谷陣屋の段

涙にくれ給ふ

折節風に誘はれて耳を突抜く法螺貝の音、かまびすく聞こゆれば、義経は勇み立ち

「ヤアヤア熊谷、着到知らせの法螺の音。出陣の用意用意」

と、仰せに直実畏まり、急ぎ一間へ入りにけり。

最前より様子聞き居る梶原平次、一間の内より躍り出で

「かくあらんと思ひし故、石屋めを詮議に事寄せ窺ふ所、義経熊谷心を合はせ敦盛を助けし段々、鎌倉へ注進」

と云ひ捨て駈け出す後より、はっしと打ったる手裏剣は、骨を貫く鋼の石鑿。『うん』とばかりに息絶ゆる

「スハ何者」

と云ふ中(うち)に立ち出づる石屋の親仁

「ハ、ハお前方の邪魔になる、木っ端を捨てて上げました。扨幽霊の御講釈、承って先づ安堵。もふお暇」

と出で行くを

「ヤア待て親仁。コリャ、弥平兵衛宗清待て」

と義経の詞(ことば)に吃驚(びっくり)。『はっ』と思へどそらさぬ

顔

「ハレヤレマとっけもない。御影の里に隠れのない、白毫の弥陀六といふ、へゝ男でゑす」

「ハゝゝゝ。誠や諺にも、至って憎いと悲しいと嬉しいとのこの三つは、人間一生忘れずと云ふ。その昔、母常盤の懐に抱かれ、伏見の里にて雪に凍へしを、汝が情を以て親子四人が助かりし嬉しさ。その時は我三才なれども、面影は目先に残り、見覚えある眉間の黒子、ナコリャ隠しても隠されまじ。重盛卒去の後は行衛知れずと聞きしが、ハテ堅固でゐたな、満足や」と、聞くより弥陀六つかつかと立ち寄り、義経の顔、穴の開く程打ち眺め

「テモ恐ろしい眼力じゃよな。老子は生まれながらに聡く、荘子は三つにして人相を知ると聞きしが、かく弥平兵衛宗清と見られた上は、ヱゝ義経殿。その時こなたを見遁さずば、今平家の立て籠もる鉄拐が峯、鵯越を攻め落とす大将はあるまいもの。又池殿と云ひ合はせ頼朝を助けずば、平家は今に栄えんもの。ヱゝ宗清が一生の不覚。これに付けても小松殿御臨終の折から、平家の運命末危うし。汝武門を遁れ身を隠し、一門の跡弔へと、唐土育王山（もろこしいおうざん）へ祠堂金と偽り、三千両の黄金と忘れ形見の姫君一人預り、

御影の里へ身退き、平家の一門、先立ち給ふ御方々の石碑、播州一国那智高野、近国他国に建て置きし施主の知れぬ石塔は、皆これ弥平兵衛宗清が涙の種と御存じ知らずや。今度敦盛の石塔誂へに見へし時も、御幼少にて御別れ申せし故御顔は見覚へねども、心得ぬ風俗はヒヤ世を忍ぶ平家の御公達ならんと、快く請け合ひしが、扨は命に代はりし小次郎が菩提の為、この浜の石塔は敦盛の志にてありけるか。ヘッヱいかに天命帰すればとて、我が助けし頼朝義経この両人の軍配にて、平家の一門御公達、一時に亡ぶるとは是非もなき運命やな。平家の為には獅子身中の虫とは我が事。さぞ御一門陪臣の魂魄、我を恨みん浅ましや」

と、或ひは悔やみ、或ひは怒り、涙は瀧を争へり。元来(もとより)聡き大将義経

「ヤアヤア熊谷、障子の内の鎧櫃、ソレこなたへ」

「はっ」

と答へて次郎直実、出陣の出で立ちと好む所の大荒目鍬形の兜を着し、御目通りに直し置く

「コリャ親仁、その方が大切に育つる娘へ、この鎧櫃届けてくれよ。コリャ弥陀六」

「ヤア弥陀六とは。フウ宗清なれば平家の余類。

源氏の大将が頼むべき筋は。ムヽ面白い。弥陀六め、頼まれて進ぜましょ。シタガ娘へは不相応な下され物。マア内は何でござります。改めて見ませふ」

と蓋押し開くれば敦盛卿

「ノウ懐かしや」

と藤の方、駈け寄り給へば蓋ぴっしゃり

「アヽイヤイヤこの内には何にもない何にもない何にもない、ヲヽマ何にもない。ハアこれでちっと虫が治まった。イヤナフ直実、貴殿への御礼はコレこの制札。一枝を切らば一子を切って。ヘッヱ忝い」

と云ふに相模は夫に向かひ

「我が子の死んだも忠義と聞けばもふ諦めて居ながらも、源平と別れし中、どふしてまあ敦盛様と小次郎を、取り換へやうが」

「ハテ最前も咄した通り、手負ひと偽り無理に小脇にひっ挟み、連れ帰ったが敦盛卿。又平山を追っかけ出でたを呼び返して、首討ったのが小次郎さ。知れた事を」

と鋭なる、咄に相模はむせび入り

「ヱヽ胴欲な熊谷殿。こなた一人の子かいのふ。逢はう逢はふと楽しんで百里二百里来た物を、とっくりと訳も云はず、首討ったのが小次郎さ、

知れた事をと没義道(もぎどう)に、叱るばかりが手柄でもござんすまい」
と声を上げ、泣き口説くこそ道理なれ。心を汲んで御大将、勇みを付けんと
「ヤアヤア熊谷、西国出陣時移る。用意如何に」
と仰せに直実
「恐れながら先立って願ひ上げし暇(いとま)の一件、かくの通り」
と兜を取れば、切り払ふたる有髪の僧。義経も感心あり
「ホ、さもありなん。ソレ武士の高名誉れを望むも、子孫に伝へん家の面目。その伝ふべき子を先立て、軍に立たん望みは。ム、尤も。コリヤ熊谷、望みに任せ暇(いとま)を得さするぞよ。汝堅固に出家を遂げ、父義朝や母常盤の回向を頼む」
と親しき御諚
「ハ、ア有難し」
と立ち上がり、鎧を脱げば袈裟白無垢。相模『これは』と取り付くを
「ヤア何驚く女房。大将の御情にて軍半ばに願ひの通り、御暇(いとま)を給はりし我が本懐。熊谷が向かふは西方弥陀の国。伜小次郎が抜け駆けした
る九品蓮台、一つ蓮(はちす)の縁を結び、今より我が名も蓮生と改めん。一念弥陀仏即滅無量罪。十六

年も一昔、アヽ夢であったな」
と、ほろりとこぼす涙の露。柊に置く初雪の日影に融ける風情なり。
「長居は無益（むやく）」
と弥陀六は、鎧櫃に連尺をかけた思案の締めくくり
「コレ、コレ、コレコレコレ義経殿。もし又敦盛生き返り、平家の残党かり集め、恩を仇にて返さば如何に」
「ヲヽヲヽヲヽ、ヲヽそれこそは義経や兄頼朝が助かりて仇を報ひしその如く、天運次第恨みを請けん」
「げにその時はこの熊谷、浮世を捨てて不随者と、源平両家に由縁（ゆかり）はなし。互ひに争ふ修羅道の、苦患を助くる回向の役」
「ヲヽサこの弥陀六は折を得て、又宗清と心の還俗」
「我は心も墨染に、黒谷の法然を師と頼み教へを請けん。いざさらば。君にも益々御安泰。お暇申（いとま）す」
と夫婦連れ。石屋は藤のお局を伴ひ出づる陣屋の軒
「ご縁があらば」
と女同士

「命があらば」
と男同士
「堅固で暮らせ」
の御上意に
「ハヽヽヽハア」
有難涙、名残の涙。又思ひ出す小次郎が首を手づから御大将
「この須磨寺に取り納め末世末代敦盛」
と、その名は朽ちぬ黄金札（こがねざね）。武蔵坊が制札も、花を惜しめど花よりも惜しむ子を捨て武士を捨て、住み処さへ定めなき有為転変の世の中やと、互ひに見合はす顔と顔

「さらば」
「さらば」
『おさらば』の声も涙にかき曇り、別れてこそは出でて行く

※演者・時間等の都合により多少の異同がございます

（一般社団法人　義太夫協会発行）